

きっと笑って会える日を

井上 泰子

「やさしそうでええ人やねえ。仕事も公務員やし、将来性もあるし・・・」

それが、つき合いはじめた当時の親の印象でした。しかし、彼が「部落」の人であるとわかってからは態度が変わり、それにともなう苦悩は今、口で言うのは簡単だけれど、思い出すと胸が痛くなります。

「もうあんな辛い思いをするのはたくさんや」

私はもとより、両親もそう思っているのではないのでしょうか。

でも、あの時の辛く苦しい月日があったから、今こうして冷静に考えることができるのではないかと思うのです。もし、あの反対された時、「何もわかってくれへん こんな親 こんなきょうだい・・・」と、悩むことなく家をとび出していたら、今の私はなかったでしょう。自分の恋愛・結婚を通して差別を知り、解放運動に目覚め、充実した日々を送る喜びを感じることはなかったのではないかと思うのです。

1976年9月、私は一人ぼっちで「北芝」にやってきました。もうこれで親、兄姉と会うこともないだろうという覚悟の上での結婚でした。でも、その寂しさを忘れさせてくれるくらい、村の人たちは、明るく私を受け入れ、私の顔を見るたびに「やっちゃん、がんばりや」と声をかけてくれました。私も「私には彼がいる、村の仲間がいる」と思いましたが、子どもが生まれると、やはり母のことを思い出すのでした。育児に疲れ、子どもと一緒に泣きたいくらいの気持ちになった時、「おかあさん・・・」と甘えられればと、いくど思ったことか。しかし、私は次第に、「このままではいけない」「もう一度、実家のみんなに会いたい」「私たちのことをわかってほしい。私たちのやってることはまちがいじゃない、とわかってほしい」と思うようになり、彼と何度も話しました。いろんなことを話し合い「やっぱりわかってもらうよう努力することが私たちの解放運動なんや」という結論になりました。でも、私たちの結論は出たものの、勘当同然のようにして出てきた“家”にどう接したらいいのか、長い間悩みました。

こうしていても仕方がない、子どもが生まれたことを報告しなければ、と決心をし、家を出てはじめて電話をかけたのです。

「元気ですか。赤ちゃん産まれたよ。」と言うのが精一杯でした。

この電話をきっかけに、親との接触が始まったのです。一年に一度の電話が二度になり三度になり、そして結婚して8年目によく家に帰ることができました。

思えば長い8年間でした。その間ずっと、私たちのことをわかってもらおうと必死でした。まず、私たちの生活や活動を知ってもらうことが一番だと思い、いろんな事を話しました。

はじめの頃は「部落」という言葉を口にするのがまだ怖くて、なかなか差別のことを話すところまでいきませんでした。少しずつ身近なことから話題にしていきました。例えば、新聞、雑誌に出てくる

気になる言葉、表現の仕方、テレビでの発言など、直接部落差別問題に関係なくても、ちょっと気になる表現などがあった場合、それについて「今はちょっとおかしい」「私は、こう思う」と話しました。そういうことの積み重ねで、だんだん差別の問題にも触れることができるようになりました。それと並行して、いろんな書物や新聞の切り抜きなどを送って、見てもらいました。

ある時、「開け心が窓ならば」という本を送りました。『読売新聞』の投書欄の、主に部落問題に関する投書を集めたものです。次の日、母から電話があり「本、読んだよ。世の中になんで差別なんてあるんやろ」と涙声で、しかし強い口調で言ってくれたのです。

それからは、本当に何でも話し合えるようになりました。私たちの運動が、部落差別の問題の解決のためだけでなく、在日朝鮮人差別の問題、障がい者差別の問題、女性差別の問題など、いろんな取組を通じてあらゆる差別を許さない闘いをしていることを話しました。特に文化的な活動については、直接見たり聞いたりしてもらうのが一番確かだと思い、ある日、チケットを送りました。聴覚に障害がある方々を中心にした劇団による、沖縄の差別を扱った人形劇でした。当日、来てくれるかどうか、朝から不安でしたが、「来てくれたよ。」という彼の言葉に、とびあがるほど嬉しい気持ちでした。父は、その劇について「沖縄の問題を自分のこととして考えていきたい」という感想を書いてくれました。私は、父の書いた「沖縄」という文字を「部落」と読みかえたのでした。

母の電話のひとつと、父の感想文が、私が生きてきた二十数年間の間で最高の喜びでした。以前は差別する側に立っていた両親が、今では差別に反対する側に立ってくれているのです。私はこの時、本当に両親を信頼しました。尊敬しました。私が変わったように、両親も私の知らないところでコツコツと勉強し、変わってくれていたのです。

1987年12月6日。私にとって記念すべき日です。気がかりだった兄の結婚式と、もうひとつ、もう一生会えることはないと思っていた姉たちとの再会。

私が結婚して以来、二つ年上の兄の結婚がうまくいかないと聞き、心を痛めていました。でもその兄の結婚がまとまり、自分のことのように嬉しく思いました。「今度、実家で冠婚葬祭があった時が私らが許される時や！」とかねてから彼と話していたこともあって「ついに来た！」という感じでした。

初めて連絡を受けた時「お母さんやお兄さんの気持ちとしては、結婚式に呼んでやりたいんやけど・・・」と、母もつらい気持ちで私に言ってくれたのだと思います。でも、何日かして「あんたにぜひ出席してもらいたい」という電話がかかってきたのです。母は姉たちと私の間でいろいろ悩み、姉たちに話をしてくれたようでした。姉たちに会える！ やっぱり私のことを気にかけてくれていたんだと、素直に喜ぶことができました。

今は、私が家にいた頃よりも、両親と仲良くなることができました。私が小さかった時のこと、父と母の夫婦げんかのこと、生活の苦しかった時のことなど、今まで聞いたこともないような話も聞かせてくれます。私の子どもたちも、おじいちゃん、おばあちゃんに部落解放子ども会の話をしませう。その話を聞きながら、父も母も、この上なく愛しいまなざしで子どもたちに接してくれるのです。

(お母さんの手記)

思い起こせば、十数年前、末娘が兄姉の猛反対をふり切って部落の男性と結婚した当時は、筆舌に尽くし難い思いでいっぱいでした。よりによって部落民と一緒にいるなんて——— その思いは、なかなか捨てきれず、世の中のあり方に腹を立てたりしたものです。

私たちが子どもの頃は、親もまた周囲も、部落民をさげすんだものです。「あの地区に行くと、こわい人がいるから絶対行ってはいけない」とまで言われて育てられてきました。そのくらい、異質のように思わされてきた部落の人間を、自分の産んだ娘が結婚相手に選んだ。

「こんなバカなことがあるだろうか。悪い夢でもみているのだったら覚めてほしい」何度もそう思ったものです。でもまぎれもなく、それは現実として私たち一家を暗いものとしてしまいました。つらい思いからのがれるべく、主人は単身赴任地からはめったに帰らなくなり、私もこのままではまいってしまうと、趣味を見つけました。幸いそのことで幾分か心をなごますことはできましたが、やはり苦しい歳月でした。

そのうち、娘から連絡が入るようになり、無事で暮らしているのならいいと思うことにしました。追々と子どもも二人でき、その頃から、私どもも娘から差別を受けた側の人たちの事を聞かされたり、さり気なく送ってくれる本を読んでいくにつれ、だんだんと私どもの気持ちが変わっていきました。

言われなき差別の長い間苦しめられてきた人たちに、私どもは追い打ちをかけるように偏見を持って接してきたことが恥ずかしくさえ思えるようになってまいりました。

もし娘が部落の男性と結婚しなかったら、私たちは誤った考えのまま、人を平気で差別する人間として一生を過ごすこととなったでしょう。私は娘に人間の本質を見ることを教えられ、また本当の愛の強さを身をもって知らせてくれたことをありがたいと思えるようになりました。

昨年、気になっていた息子の結婚の際も、姉妹の中で一番気を使ってくれた心優しい娘夫婦に、今は感謝の気持ちでいっぱいです。まだまだ差別は根強く残っていることも事実です。

「差別」———この言葉が地球上から消え去ることを願ってペンを置きます。

部落解放研究所編『心に翼を』より